

は じ め に

この年報は当研究所が1988年度に行った調査・研究と各種事業活動の概要をとりまとめたものである。近年、高原景気といわれるほどの好況下に、開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査は一層緊急度と件数を加え、文化庁の集計によると1988年度には全国で22,923件の発掘調査が行われ、これに専従する地方公共団体等の職員は約4000人に達している。飛鳥・藤原京・平城京等の発掘調査を担当している当研究所もこうした状況と無縁ではなく、両調査部が本年度に実施した発掘調査は合わせて57件、38,100平方メートルに及んだ。また全国の発掘担当技術者を対象として埋蔵文化財センターが行っている各種研修事業も13コース、252日間に受講生280名を数えた。研究所というとは何か優雅な雰囲気を想像される方もあろうが、実態はこうした発掘、研修や各地への調査指導等の日常的業務に追われ、加えて平城・藤原両宮跡の約130ヘクタールに及ぶ国有地の整備・管理に多大の労力を費しているのである。しかし一方では建造物・史跡・名勝など不動産文化財に関する唯一の国の研究機関として、新しい調査・保存技術の開発や研究情報資料の集積整理などにも積極的に取り組んでいる。本年報でこうした幅広い研究活動の一端を知って頂ければ幸いである。

本年度の成果としては長屋王邸の発掘が学界のみならず一般の方々の関心も大きく集めた。木簡は昭和36年に平城宮跡で発掘されて以後逐年に出土例を増し、最近では全国で約5万点弱に達していたが、長屋王邸跡からはほぼそれに匹敵する量の木簡が発見された。しかもそれは和銅末年から霊龜2年に至る数年間に王家の家政機関で使用された木簡の一括遺品である。その結果、当時の貴族の生活が具体的に明らかになると同時に、その経済基盤となる所領の存在も判明し、従来律令の条文等のみで考えられていた奈良時代の社会経済制度に大きな問題を投ずることとなった。木簡の整理・解読にはなお相当の期間を必要とするため、本年報には主要なものだけを紹介しているが、これに続いて長屋王邸の北側に当る二条大路上の溝からも天平7～9年の木簡約4万点が発掘され、木簡学の重みは飛躍的に増大している。

その他、発掘では飛鳥の石神遺跡、藤原宮跡の内裏東外郭地区、平城宮跡の第二次朝堂院、史跡頭塔などでそれぞれに成果を収め、また前年度に購入した解析図化機を用いた計測技術や出土金銅製品のさび除去法など最新の開発研究も進んでいる。また施設面では飛鳥藤原宮跡発掘調査部の新庁舎がようやく完成して永年のプレハブ暮らしに別れをつけた。研究所がますます充実発展するよう今後とも多くの方々の御支援と御鞭撻をお願い致したい。

1990年2月

奈良国立文化財研究所長

鈴木嘉吉